

7. 大廓式土器（古）の検討

丸ヶ谷戸遺跡では、系統の異なる土器の多彩な出土を大きな特徴とする。それは、弥生時代後期には見られなかった現象であり、社会的な変化に呼応した動きとして重要な意味を持つ。本節では、伊勢湾地方の土器の影響を受け出す段階から本地方（駿河湾地方）で小型丸底土器が器種構成に加わる直前までを大廓式土器（古）としてその内容を概観してみたい。駿東地域は、弥生時代後期に縄文を主文様とする土器文化を形成していた地域であり、大廓式土器段階になるとその中に伊勢湾地方を中心とした西方からの土器の流入が見られるようになる。伊勢湾地方、畿内地方に対する立場は、あくまでも土器を文化とした受容する立場であり、その受容の多少により遺跡の間での様相を大きく異にする。そのため外来系土器の影響が顕著に見られる遺跡と弥生時代の伝統を色濃く残す遺跡の両者が見られ、状況を複雑にしている。特に後者に関しては、弥生時代後期との識別が非常に困難であり慎重な検討を必要とする。

以下では、駿東地域における外来系土器のあり方に主眼をおき、大廓式土器（古）について段階的に検討してみたい。

編年試案

1段階

丸ヶ谷戸遺跡において、前方後方型周溝墓、方形周溝墓の造墓活動が行われた段階を1段階とする。現状では、この段階の良好な資料にめぐまれていないが、上石敷遺跡K-1号竪穴住居跡、同K-4竪穴住居跡（第一-19図）、沼津市八兵衛洞遺跡B-38号住居址、同C-9号住居址が相当するものと思われる。出土土器には、甕、高坏、小型高坏、鉢、がある。甕は平縁で刺突文を施さない台付甕D2が盛行し、やや出土数は少ないようであるが平底甕D2も見られる。また、台付甕D1も台付甕D2と併存するが徐々に出土比率を低くしていく。台付甕Dは、球形のものと胴部の張りの弱い長胴のものが見られる。この段階より新たに外反する口縁部の端部外面を削って面取りする甕Bが出現する。

高坏は、高坏Aが現われる。口径23cm前後の大ぶりで坏部が深いものである。坏部はやや内彎気味に開き口唇部の面取りがほとんど見られないものと、面取りを行う両者が見られる。脚台部は、内彎しながら開き円孔を施す。また、高坏Fもこの段階より出現するようである。この段階の高坏Fは、その坏部のやや広い底部から直線的に開く口縁部を形成する。脚台部はやや内彎しながら直線的に開くものと脚台部端部が外反するものとが認められる。

小型高坏は、小型高坏A bが二形式認められる。1つは、矢部遺跡における分類の高坏E2に相当するものである（注1）。これは、深い半球状の塊形の坏部を形成するもので、やや短めの脚台部が付くものである。もう一つは、廻間遺跡の形式分類の塊形高坏B2に相当するもの（注2）で口唇部内面を面取りした半球状の塊形の坏部とわずかに外方へ開く柱状の脚台部が見られるものである。これは、作りが非常に丁寧で、細かいヘラミガキで整形して仕上げている。

鉢は、胴部の張りのやや弱い鉢Eが見られる。これには平底のものと凹み底のものがある。凹み底のものは、平底甕Bと同様に畿内第五様式の技法を借用しているものであるが、内外面ともハケメ調整で仕上げている点が特徴的である。

壺は、良好な共伴関係を示すものが多く不明な点が多いが、基本的には、弥生時代後期の各形式を踏襲するものと思われる。ただ、壺Dの中で、口唇部内面を面取りするものが出現する。その出自は、西遠江地域の西遠型欠山様式の中で盛行する口縁部内面の整形技法(注3)に求められそうであるが、本来、文様帶を作るための面取りであるべきところが駿東地域の場合、円形の貼付文が施される程度で無文のものが多く、形骸化したものが目立ちやや様相を異にする。また、この段階より壺Eの口縁部付近に小さな円孔を2~4個1組として等間隔に2~3ヶ所施すものが見られるようになる。

1段階は、高壺Aと小型高壺A bの出現を画期とするが、その組成に小型器台は加わっていないようである。

2段階

丸ヶ谷戸遺跡堅穴住居跡02、南部谷戸遺跡第12号住居跡、上石敷遺跡M-1溝状遺構の資料をもって代表させる。

各形式内容については、丸ヶ谷戸遺跡の土器群で充分表わしていると思われる所以再述しないが、丸ヶ谷戸遺跡で見られない器種では、大型壺B、壺E c、台付甕B、平底甕B、小型高壺A bなどが確実にこの段階の形式になっているものと思われる。また、駿東地域特有の鉢形高壺がこの段階で消失しているようである。

2段階は、高壺A、高壺D、小型高壺A a、壺Gなどに代表されるように伊勢湾地方からの影響が顕在化し、外来系土器の6割以上を占めるようになる。

3段階

神奈川県千代南原遺跡第IV地点の良好な資料をもって代表させる。その他伊東市内野町第1号住居址、長泉町下長塚上野遺跡第12号住居址、沼津市目黒身遺跡第9号住居址、同大廓遺跡B住居址などがこの段階のものと思われる。

甕は、台付甕A、台付甕B、台付甕C、台付甕D、平底甕Dが見られる。台付甕Aは、この段階より顕在化しており出土数もふえ、台付甕A aと胴部が球形を呈する台付甕A bが認められるのをはじめとして多種の型式差を示し、受容地域としての変容がすすんだ状況を表わしている。技法的には、内面のヨコハケや口唇部の面取りなど赤塚分類のB類(注2)の特徴を備えたものがみられる。また、この段階より口縁部が「く」の字状に屈曲する台付甕D3が出現する。

壺は、大型壺B、壺A、壺B、壺D、壺E、壺G、小型壺Aが見られる。壺A、小型壺Aは、第2節で述べた通り二形式が認められこの段階以後顕在化する。この段階の壺A、小型壺Aは加飾性が強い。また、壺B bが出現するようであるが総体的な出土数が少なく出自など不明な部分が多い。壺D、壺Eは、前段階から漸移的な型式変化をし、短頸化、胴部の球形化がすすみ「く」の字ぎみの頸部を形成するものが見られるようになる。壺Gは、短頸のもので胴部最

大径を下位にもつしもぶくれ状の形状で、底部が凹みをもつ丸底のものが見られる。口縁部および胴部の文様は欠落する。2段階より見られた壺Gは、この段階をもって消失する。

高坏は、高坏A、高坏D、高坏F、小型高坏A a、小型高坏Bが認められる。高坏Aは、坏部が浅くなり、口縁部の内彎の弱いものがふえる。また、脚台部は、横線文が欠落し、外反する形状のものが多い。高坏Fは、脚台部が直線的に開くものとその端部が外反するものが前段階同様認められる。坏部は内彎傾向が強まり碗状を呈する。小型高坏A aは、坏部が浅くなり口縁部の外傾が目立つようになる。その脚台部は、柱状部がほとんどなくなり、坏部から直接大きく広がるものが多い。また、坏部、脚台部の文様は欠落する。高坏Aを模倣した小型高坏Bがこの段階より出現する。

鉢は、鉢Eがみられる。鉢Eは、やや大型化し、胴部が無花果形のものと球形のものの2種類が認められるようになる。また、口縁部は頸部の屈曲が弱まり垂直ぎみに立ち上がる。

3段階の大きな特徴は、新たに小型器台が明確に出現することである。小型器台は、器台A、器台B、と器台Cが見られる。器受部の底部と口縁部との境界に明瞭な稜をつくる器台Aは、器受部が深くまだヘラケヅリ整形の見られない器台A aが主体で、口縁部が垂直気味に立ち上がるものと外傾するものが見られ、いくつかの形態が存在するようである。脚台部は直線的に開くものと外反するものが認められる。器台Bは、器受部が直線的に開き、その口唇部を面取りするものが見られる。それは、まだ、端部の短いはねあげが見られない初源的な形態を示すもので、脚台部も内彎の傾向が強い。また、器受部が内彎気味に広がって小皿状となる器台Cが見られる。

3段階は、各形式にやや型式差が認められ将来的に更に細分される可能性をもつ。それには、小型器台と小型丸底土器の組成や小型丸底土器の代用形態などの問題を含め、駿東地域の良好な資料の蓄積を持って再検討する必要がある。

丸ヶ谷戸遺跡の時代的位置づけ

前述したように大廓式土器（古）の中では、1・2段階と3段階の間に器種構成上大きな二期がみられ、遺跡の立地にも大きな影響を及ぼしているようである。大廓式土器（古）の1・2段階の遺跡の中で外来系土器を顕著に保有するものは、駿東地域でも狩野川中流域田方平野の南部（山木遺跡、奈古谷遺跡）と潤井川中流域の富士山南西麓、星山丘陵など（月の輪遺跡群、滝戸遺跡、泉遺跡、上石敷遺跡、丸ヶ谷戸遺跡）で主体的に見られ局地的な分布を示す。その反面、愛鷹山麓～箱根山麓では弥生時代の伝統を色濃く残す八兵衛洞遺跡などの遺跡が継続的に営まれている。分布の差の要因は不明であるが、この段階の外来系土器の流入が面的なものではなかったものと理解される。

また、潤井川流域と狩野川流域では地形的な相違が顕著で共通した立地条件とはならない点も注意される。

1、2段階は、高坏A、小型高坏A、壺Gなどの型式的な特徴および器種構成より、廻間Ⅱ

式期の前半（注2）と考えられる。また、畿内との併行関係は、高环E、平底甕E、手焙形土器などの特色のある器種より、纏向遺跡東田地区南溝中層段階、寺沢編年庄内2～3式期（注1）と捉えられるものと思われる。

大廓式土器（古）の3段階は、目黒身遺跡、内野町遺跡に見られるように外来系土器を持つ遺跡が平野部を中心として面的な広がりを見せて分布するようになる。外来系土器の主体は、あくまでも伊勢湾地方の影響が窺えるものが主体であるが、その移動は前段階より活発なものであったようである。

3段階は、赤塚が述べているように廻間Ⅱ式期後半～廻間Ⅲ式前半（注2）があてられ、寺沢編年の布留0式期（注1）ぐらいが併行するものと思われる。この段階の動き（併行関係）は、大廓遺跡B住居址出土の駿河湾地方特有の大型壺Bと同型式のものが布留0式期のものとされる纏向遺跡辻地区土塙4下層で出土していることに象徴される。また、関東地方の併行関係では滝沢の言うⅡ期（注4）に相当する。尚、1・2段階が赤塚の言う第1次拡散期に相当し、3段階が第2次拡散期に相当するものと思われる（注2）。

土器の受容

丸ヶ谷戸遺跡の土器は、外来系土器の受容を大きな特徴とするが、その故地は、伊勢湾地方、畿内地方（大和）、北陸地方と多岐に亘り、その動きも一系統ではないようである。北陸系の平底甕Fは、北陸地方東北部のものとして中部高地を南下し、さらに富士川を媒介として搬入した可能性がある。中部高地との関係は、1段階のものと思われる上石敷遺跡K-7号竪穴住居跡、沼津市雄鹿塚遺跡Aトレンチ6区の箱清水系土器によりその交流が想定され、中部高地と駿河湾地方とを結ぶルートはすでに1段階で成立しているものと思われる。それが2段階における北陸系土器の波及経路としては、容易に捉えられ、日本を縦断する動きがあったものと理解される。北陸系土器は、丸ヶ谷戸遺跡のほかに駿河湾地方では、藤枝市稻ヶ谷8号住居址、富士市宇東川A遺跡67号住居址（第6図）（注5）、沼津市藤井原遺跡Bトレンチ4区において、所謂「5」字状有段口縁甕が見られ、北陸～中部高地のものと思われる蓋が沼津市目黒身遺跡第9号住居址、韮山町奈古谷宮原遺跡第1号溝、伊豆長岡町鳥井前遺跡第8号住居址で出土している。

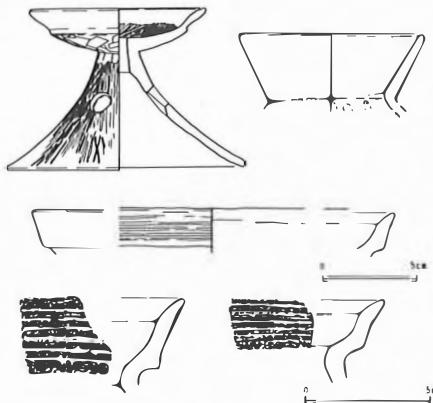
「5」字状有段口縁は、加賀地方で主体的に出土を示し、加賀→近江・伊勢湾地方→駿河の経路を辿って波及するものらしい（注6）。そしてその移動は、伊勢湾地方の土器群と同調し運動した動きを示す。このように駿河湾地方において北陸系土器は、出自に二元性が認められ、波及経路に二系統が見られ、多彩な交流を物語るものとなっている。

一方、畿内系土器は太平洋沿岸を東海道沿いに波及したことで大過ないが、平底甕F、高环Fの移動に見られるように東山道を経由した可能性も考えられる。それが直接的なものかどうか不明な部分が多いが、両経路の中間地点に位置する伊勢湾地方は、多かれ少なかれ畿内系土器の移動に影響を及ぼしていたものと思われる。伊勢湾地方では特に愛知県伊保遺跡柵口地区溝

状遺構、同高木遺跡10号周溝墓下溝状遺構、同本神遺跡壕状遺構、同中狭間遺跡溝状遺構などの矢作川流域（西三河）の諸遺跡において畿内系土器が顕著な出土を示している。また、同地域の遺跡では、北陸系土器、東海東部系土器の出土も目立ち注目される（注7）。それは、この地域を介在として畿内系土器や加賀地方をその出自とする北陸系土器が駿河湾地方に移動した可能性も充分考えられるものである。丸ヶ谷

戸遺跡堅穴住居跡02と中狭間遺跡溝状遺構の土 第6図 富士市宇東川A遺跡第67号住居跡出土土器
器との間で器種構成上類似点が多く、中狭間遺跡の類例がやや古相を呈する点は、その動きを傍証しているものと思われる。

大廓式土器（古）段階は、土器の「搬出」、「搬入」およびそれに伴う「模倣」が顕在化し、広範囲の地域間交流が始まる。その内容は高坏A、小型高坏Aに代表されるように伊勢湾地方との関連が強い。しかし、外来系土器として畿内系土器、北陸系土器などの搬入は、その交流が一元的でないことを物語っている。大廓式土器（古）段階は、搬入（模倣）する土器群に系統的な重層性が見られ、ある程度の範囲を有する面的な交流がすでに開始された段階と理解される。それは、背後の政治的な力を想定させるものであり、時代の大きな画期の存在が窺えるものである。



注1. 寺沢薰 1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第49冊

奈良県立橿原考古学研究所

注2. 赤塚次郎 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

注3. 鈴木敏則 1985「欠山式の地域性」「転機」創刊号

注4. 滝沢亮 1984「神奈川県」「古墳時代土器の研究」

注5. 宇東川遺跡は、富士市教育委員会により現在調査が継続中である。この遺跡は縄文時代～平安時代まで見られる複合遺跡で非常に遺構の重複が著しい状況にある。そのため各々の遺物の出土地点と遺構の関係は容易には理解し難い。第6図は富士市教育委員会の御好意により掲示させていただくものであるが、今後遺物の所属遺構などに変更の可能性があるものであり、正式な報告書刊行時にその正確なデータが呈示されるものと思われる。

注6. 比田井克仁 1987「南関東出土の北陸系土器について」「古代」第83号

注7. 川崎みどり 1987「三河における「欠山式土器」とその前後」「欠山式土器とその前後一研究、報告編」

その他の引用文献

- 愛知県考古学談話会 1986『欠山式土器とその前後 第3回東海埋蔵文化財研究会』
- 伊豆長岡町教育委員会 1981『鳥井前遺跡』
- 小田原市教育委員会 1987『千代南原遺跡第Ⅳ地点』
- 小野真一、笹津備祥 1969「沼津市大廓発見の居住址と土器」『歴史科学』第20輯
- 小野真一、秋本真澄、藪下浩、原茂光、1978「北伊豆函南町向原遺跡発掘調査報告」駿豆考古13
- 小出義治 1990「伊豆半島における古式土師器」「土師器と祭祀」雄山閣
- 桜井市教育委員会 1977『纏向』
- 杉山治夫 1979「北神馬土手遺跡とその遺物」沼津市歴史民俗資料館紀要3
- 逗子市教育委員会 1975『持田遺跡発掘調査報告』
- 駿豆考古学会 1979『駿豆地方弥生式土器集成』
- 瀬川裕市郎・山内昭二・小野真一 1979「二本松遺跡の土器と方形周溝墓」沼津市歴史民俗資料館紀要2
- 世田谷区教育委員会 1982『下山遺跡I』
- 長泉町教育委員会 1979『下長窪上野遺跡』
- 名張市遺跡調査会 1978『蔵持黒田遺跡』名張市文化財調査報告第1冊
- 垂山町 1979『垂山町史 第1巻 考古篇』
- 垂山町 1979『垂山町史 第2巻 考古篇』
- 沼津市教育委員会 1970『目黒身』
- 沼津市教育委員会 1978『藤井原遺跡発掘調査報告書I 遺構編』
- 沼津市教育委員会 1979『御幸町遺跡第1次発掘調査概報』
- 沼津市教育委員会 1981『八兵衛洞遺跡群発掘調査報告書』
- 沼津市教育委員会 1989『雄鹿塚遺跡発掘調査報告書』
- 沼津市教育委員会 1989『豆生田遺跡発掘調査報告書』
- 藤枝市教育委員会 1980『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書I—縄文、弥生時代編—』
- 富士宮市教育委員会 1981『月の輪遺跡群』
- 富士宮市教育委員会 1981『月の輪遺跡群II—月の輪上遺跡(B地区)—』
- 富士宮市教育委員会 1985『上石敷遺跡』
- 藤森栄一 1939「信濃下蟹河原における土師器の一様式」考古学10-11
- 三島市教育委員会 1983『中島下舞台遺跡』

(山上英誉)